

④『ガン』にならないよう、また、なった方の予後の栄養について相談を受けたり、希望があれば1人でも調理実習を開催しております。我が家で実習することもあります。皆さんの治療したいという必死の熱意に私も動かされております。調理方法はアメリカの認定ケアギパーに沿って指導しています。日本にはアメリカの講義を受け、試験に合格したケアギパーは2～3人しかおりません。ある程度の理論も話すように心掛けておりますが、大変難しく、患者自身が理解していけず、長続きできない人も多いようです。そして再発することも多いです。

⑤問題を成し得るためにお知恵をいただいております医者先生方の講演会など開催の時のお手伝いもしております。例えば、元ガン大塚病院副院長の済陽（わたよう）先生、精神面の指導の名誉教授の大沢教授、カナダのホッフ博士、名誉教授の星仁彦教授、船瀬俊介先生、丹羽正幸先生、アメリカのシャーロット・ゲルソン女史など、挙げることができないほどの多くの先生方にお世話になっております。

このようなことをお手伝いし続けてあっという間に20年以上も経ってしまいました。いつまで出来るのか分かりませんが、今後も一生懸命取り組みたいと思います。天使で学んだ学習の基礎の上に、多くの学問と知識を積み上げながら……。



## バトンタッチの時

S r . 中島 その枝

私が天使にお世話になりましたのは、40年以上も前のことになります。あのころは私も30歳台で若く、未熟者で思い出すと恥ずかしいことばかりです。皆様の心に傷をつけたことなどを赦していただきたいと思います。その私がもう80歳になりました。80年生かして戴き人生を締めくくる時になりました。私は人生の終わりに当たってまだ体力のあるうちに何か最後のご奉仕をしたいと被災地で私に出来ることをさせていただこうと思い、被災地に近い宇都宮に異動いたしました。ところがもう、高齢者は足手まといにこそなれ、却って邪魔になることを見聞きし、専ら家事に専念することになりました。でも心のどこかに何か役に立つ存在でありたいという願望でしょうか、欲望がありました。もう役立たずになった自分は、存在を否定されたような気持ちになり私なりに葛藤がありました。世代交代とはこういうことを受け入れていくことなのだと頭で分かっても気持ちが落ち着きませんでした。

そんな気持ちを友人に話したところ、その友人はこういいました。「日々の生活の中にはよく見ると隙間がある、その隙間を人知れず、目立たず埋めることの大切さ、それこそ零れ落ちたダイヤを拾うことではないかしら」と。これをする、あれをするというより、そういう存在が居てくれるということはどうでしょう。家庭、または共同体の中で周りをなごませ、憩わせることになるのではないのでしょうか。そんなあり方でこれからを過していきたいと思っているところです。

— 私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

(II コリント 4:16) —